

## 寺田縄の石仏探訪シリーズ（3）吉祥院

寺田縄地区内の寺社や路傍にまつられている石造物（以下石仏と呼称）は約 50 基あります。三回目の今回は吉祥院の山門前の六地藏、馬頭観音、庚申塔（道標を兼ねる）などを紹介します。

### （1）六地藏

六体の地藏を寺院や墓地の入口でよく見かけます。六道輪廻（生きとし生きるものは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天道界の六道を生まれ変わる）するという地藏信仰は日本独特のものと云われていますが、天道界にあっても寿命と云う悩みがあり、来世の行き先が最大の気がかりではないでしょうか。

六地藏には尊名・印相（手の形）、持物（持ち物）など何種類かあります。吉祥院のものは『仏像図彙集』を参考に製作されたものです。像容は向かって右より①右手に錫杖・左手に宝珠（単体でもよく見かけられる代表的な地藏。六道のうち人間を救済）、②両手で合掌（天道）、③柄香炉（地獄）、④念珠（畜生）、⑤幢幡（飾りのある竿柱に布を垂らす。争い事がたえない阿修羅を救済）、⑥天蓋（強い日差しを避けるための日傘を上から垂らす。飢えに苦しむ餓鬼を救済）の六体の地藏です。



一方、台石（蓮華座の下の角柱石）に彫られている尊名（地藏名）は右より①地持（分担は天道）、②鶏兜（人間）、③寶印（修羅）、④宝積（畜生）、⑤陀羅尼（餓鬼）、⑥法性（地獄）の順序に並ぶ。来世に衆生が生まれ変わりたい順の配列となっていますが像容と台石が一体物で作られていないため、その後の移設工事などで

組み合わせが変わることもあり、金田地区に 6 組ありますが、同じ組み合わせのものは見当たりません。機会がありましたら六地藏をご覧ください。左端の地藏の肩には珍しい天蓋が彫られています。この六地藏は明和 3 年（1766）に寺田縄の念仏講中と庚申講中が共同で建立したものです。

## (2) 馬頭観音

吉祥院山門前の墓地の入口脇に写真のような像容の塔と文字塔の2基の馬頭観音が<sup>ばとうかんのん</sup>あります。馬頭観音は変化観音の一つで頭に馬を乗せ、<sup>むみょう</sup>無明や<sup>ぼんのう</sup>煩惱を馬食のごとく食べつくすと云われています。平安時代の六観音信仰のなかでは畜生道守護の役割でしたが、江戸時代以降は馬の供養塔として造立されてきました。



←左側の写真

慶応4年 高橋…の銘あり

全体の高さは60cm

右側の写真 →

正面に「馬頭観世音」の文字が併記してあり、二頭の馬を供養したと思われます

こちらは明治4年の記年銘

記年銘より運搬用に使役した



馬の供養塔と思われます。

なお寺田縄には「JA 湘南あさつゆ広場」の東南の角に石塚家の氏名と昭和9年と彫られた馬頭観音があります。

## (3) 道標

石塔の「道標」は<sup>どうひょう</sup>道案内を主体のものと、信仰目的に建立した石仏に道標を兼ねた二種類があります。寺田縄には後者「庚申塔に道標を併記」のものが二基あります。吉祥院の門前に庚申塔に道標を記した石仏があります。銘文は塔の正面「庚申塔 伊勢原 大山道 四之宮」塔の左面「此方 大磯道」同右面「此方 金目 十日市場 小田原」同裏面に天保15年(1844)、台石に造立者5名の記名これらの銘文を参考に当時の古道を調べ、どの位置に建てられていたかを調べるのも面白と思います。同じく「庚申塔に大山道など道標併記」のものが陶房「芳乃和」さんの傍(新幹線寄り)にあります。



参考文献：・平塚市博物館 2014年『平塚の石仏 3058の祈りと願い』  
・平塚市博物館 2013年『平塚の石仏 改訂版8金田地区編』

以上